

## V. J. ベニット

### ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割 (Ⅶ)

内 尾 一 美  
渡 辺 信 生 訳

#### J. J. バッハオーフェンの「母権論」

ヘッセの作品における女性の役割の形成に意義深く貢献したのは、基本的に言って四つの源泉である。第3と第4の源泉の貢献は、いくらか付随的なものであるといった方がよいかも知れないが、初めの二つの源泉は、目下検討している問題に密接な関係を持っている。これら四つの主な研究領域には、古代における女性優位の興隆と衰退に関する、J. J. バッハオーフェンの選集、C. G. ユングの心理学がヘッセに与えた衝撃、最後にニーチェとドストエフスキーの著作が及ぼした影響が含まれている。

ヘッセは、古代の母権制社会に対する自分の関心は、バッハオーフェンによって始められた大復古運動のおかげであると思っていた。筆者は、母権制の領域の研究仲間であるルードヴィヒ・クラージェス、或いは、E. ベルクマンの思索を、長たらくこまごまと分析しても、目下の仕事にとって特に適切と言うことでもないであろうと感じている。クラージェスはバッハオーフェンの崇拜者で、世紀転換期におけるバッハオーフェンの復活に貢献したけれども、この両者の哲学には根本的な相違が、矛盾さえもが存在する。従ってバッハオーフェンのみに議論を集中することが望ましいと考えられた。

バーゼルの知識人である J. J. バッハオーフェンは、1861年にその「母権論」を出版した。彼はこの母性と母権という概念に、「精神の倦怠という時代心理的な前提に、個人的に加担することによって到達したのではなかった。むしろ彼は古代研究家として母権制の現象に行き当たったのである。」<sup>1</sup>一方において、彼自身の母親に対するバッハオーフェンの深い永続的な讃美が、彼の研究にかなりの刺戟を与えたとし、また他方において、主として神話の直観的な解釈を本質とする、彼の全く非実証的な研究方法は、彼の長足の進歩のもとになった。彼は一般に「ロ

マン派の神話学者・・・と見なされていた。なぜなら、彼においていわば全ドイツロマン主義がその目標に到達していたからである。」<sup>2</sup>すなわち、それは「天上の明るい神々の前に、ますます黒っぽいやヴェールがかけられるように、畏敬の戦慄にみだされ、本能的なもの、形態のないもの、デモーニッシュなもの、性的なもの、恍惚にするもの、峻厳なものの中に、母性崇拜の中に、深々と浸されている」<sup>3</sup>あの特種なロマン主義であった。

偉大な学者たちの中にも、バッハオーフェンが示したような客観性に対する能力と公平の才能を持った人は少なかった<sup>4</sup>。しかし彼の才能の父親となり、それを助長したという荣誉は、バッハオーフェンによれば、独特なロマン派の歴史研究の大家たちに与えられるべきものであった。これらの学者たちの中に、1835年から1837年までベルリン大学でフォン・ザヴィニイの講義に出席し、この傑出した学者と深い親交を結んだ著名な法律学者フリードリヒがいた。フォン・ザヴィニイはちょうど30年前に、グリム兄弟を言語学者、神話学者、民俗学者として、その輝やかな経歴へと送り出した教授であった<sup>5</sup>。

バッハオーフェンが最後に到達した結論は、先史時代においては母権が支配していたということであった。そしてこの正当性を彼は、彼が研究した古代の無数の神話の解釈に基づいて主張したのである。しかし我々は、ここで彼が下した推論や結論にかかわる詳論に目を向けたい。筆者は、ヘルマン・ヘッセのさまざまな作品に述べられている観念と一致している側面や、その観念に反映されている側面を主として強調するつもりである。ヘッセの作品の中にバッハオーフェンの影響が、どの程度明白に現われているかということに関する分析は、次章において取り上げるであろう。

母権制社会の先行についてのバッハオーフェンの理論は——その母権制社会から現代父権制社会が発展してきたのであるが——最後には人類間の最も初期の、最も原始的な社会に到達するために、主として後ろ向きの演繹的推論に基づいている。彼の推論によれば、社会が法と規則を採用する時代よりも以前の状況が存在したのであり、そしてこの状況は原始的な乱婚であるとされる。所与のいかなる時代においても、性的関係が規制されたのであれば、そのような関係が規制されておらず、乱婚が支配的であったそれ以前の状況が存在したと仮定することは、論理的で、理にかなっている。

こうしてバッハオーフェンは、母権制社会における性的な事柄に関する厳格な道徳の根拠は、堪え難いものとなった社会状況に対する反動としてのみ説明されるものであったと断言する。もし本当に乱婚が乱婚禁止の根拠ではないとするな

ら、それを規制する理由は殆んどなかったことになる。バッハオーフェンによれば、はびこる乱婚から出てきたもの、或いはそれにとって代ったものは、社会一般におけると同様に、家庭における母親の支配であった。名前と財産は、父親から息子へというよりむしろ母親から娘へと伝えられた。この極端な事態は、バッハオーフェンによってアマゾニズムと名づけられた。そしてもしこのような秩序が成り立つ何らかの根拠があるとすれば、それはその厳しい監督の下で、すべての問題が取り扱われた実際の母権制社会に由来するものでなければならなかった。厳格な母権的秩序の論理的な帰結、或いはそれに対する反動は、上述の秩序の崩壊であり、そして社会における父権的秩序の復権——このたびはしかし理論的には先ず最初に女性の支配を生み出した原始性を除外した——であるだろう<sup>6</sup>。

バッハオーフェンの社会評価の体系における三つの段階は、第1に婚姻も農耕も、政治的な状態への接近を示すようなものは何もなく地上の時代、次に、結婚した母親があり、農耕共同体があり、正当に子供をもうける慣習のあった月の時代、3番目に、婚姻上の父権が支配し、義務と労働の分割、財産の個人的所有が生じた太陽の時代であった。これらの神話的な名称は、現代の読者にとってきっと奇妙に、恐らくは迷信的にさえ聞こえるであろうが、それらは今日でもなお我々の感情や芸術や表象の中に見出されるある種の宗教的痕跡に確かに一致している<sup>7</sup>。

地上の時代の枠組の内側では、性的な、親としての関係は、人間が専ら地上に依存していたことを示している。食物の採集と地下の神々の信仰もまたこの依存を示すものである。女性が男性に対して支配的な態度をとるとき、類似した一致が、作物の耕作や月の崇拜と、生産力を守り高める神々との間に見出されるであろう。そして第3の、すなわち、太陽の時代に関しても、似かよった事実が見出される<sup>8</sup>。

「母権と原始宗教」の英訳の序文に、ジョウジフ・キャンベルは、バッハオーフェンの批判者や崇拝者たちの多くは、彼が異教徒の一東方的なものとキリスト教的—西洋的なもの—これは単に古代的母権的なものと、現代進行中の父権的なものに対する現代の用語にすぎないのだが——とを両方とも完全に承認していることを、かなり注目に値すると見なしていたことに特に言及している。ゼーレン・キルケゴールは、異教的なものを嫌悪すべき堪え難いものと思ひ、キリスト教的なものを選んだ。逆にフリードリヒ・ニーチェは、キリスト教的なものを犠牲にし、これを排除して、異教的なものの美点を賞揚した。しかし堅実なプロテスタントであるバッハオーフェンにとって、両者に対する寛容は、特別な問題を提起

するようには全然思われなかった。というのは、彼は同時にキリスト教信仰の献身的なメンバーでもあり、またアフロディテとデメテルの儀式的な精神的かつ啓示的な解釈者、主唱者でもあったからである<sup>9</sup>。

上述の文脈において、人々は直ちに多くの見識のあるキリスト教徒の人文主義者たちが、戦わねばならなかった二元論を想起する。「あゝ、私の胸の中に二つの魂が住んでいる」と進退きわまったファウストは思案した。けれども胸中のこの二つの魂は、主としてキリスト教的なものと同教的なものとの二元論的矛盾というよりは、むしろアポロ的なものとディオニゾス的なものであった。これらの人文主義者たちは、キリスト教徒であるために理性を放棄せざるを得なくなることもなく、まだギリシヤ人たちを受け入れ賞讃するために、キリスト教を捨てねばならないということもなかった。ヘーゲルはその哲学に従って、これらの思考の分れを、単にそこからジンテーゼが生じてくるテーゼとアンチテーゼと考えた。ゲーテはこのジンテーゼを、両者の婚礼を工夫することで——すなわち、ファウストとヘレネの結合によって表現しようと試みた。このような現象は、バッハオーフェンにとって何ら苦悩やディレンマの原因にはならなかった。彼が同等の肯定と理解を以って考察したのは、アフロディテとデメテルの、すなわち、遊牧の段階と初期農耕の段階である太古の大地に根ざした様式から、より高度の文明、すなわち、アテネ、ローマ、中世、人文主義的近代の文明の持つ、より高い明るい様式に至るあらゆる段階、彼が人間理想の通常の整然たる発展と考えたものあらゆる段階であった<sup>10</sup>。

バッハオーフェンは、人類の社会的発展は本質的には三つの段階を通して、進歩ないしは進化してきたものであると想像していた。ところが人類の精神の成熟の過程は、五つの大まかな段階の枠組の中で考えていた。初めの二つの段階は、女性志向であり、残りの3段階は男性によって支配されている。このような図式を念頭に置いて、ヘルマン・ヘッセによって考えられた「母性思想」の背景の解明に、それらの影響と妥当性があり得るかどうかが、ということに関して、社会的、精神的発展のこれらの初期の段階のさまざまな面を、差し当りより綿密に検討して行くことにしよう。

地上的生活の最も低い、純粋にアフロディテ的段階は、物質的—女性的原理によって支配されている。この特定の段階の特徴は、規制されていない性的関係、財産やあらゆる私的権利の欠如、婦人や子供の、従って全財産の共有の観念である。それは形式のない、秩序のない自由の段階であり、個人間の唯一のきずなは、アフロディテ的欲望のきずなである。まだ固定した住居はなく、死を以って終り、

墓以外には安定した休息の場所を知らない遊牧民の生活だけがある<sup>11</sup>。

「実際、我々の性の最初の広がり急速な成長には、こうした種類の状況は、たとえそれが今ではどんなに低級で品位のないものに思われようとも、疑いなく絶対に必要だったのである。…純粋にアフロディテ的な原理は、デメテル的なものに道をゆずる。それと同時に、共有の代りに個人の独占権が、売春の代りに婚姻が、自由な生殖とアフロディテ的な独立した生殖の代りに、『働く穀物の女神ケレス』が登場する。」<sup>12</sup>

自然法は投げ捨てられるが、より高貴な状態で再び受け入れられ、復権させられる。農業の始まりとともに、母権は新たな意味を持ち、高められた形態を取る。沼地の野性的な生殖の原理の代りに、土の耕作者が登場して、畑に種をまき、「陽気な刈り手たちが、ケレスの手足を切るとき」<sup>13</sup>滋養分の多い果実、デメテルの食物を収獲する。

大地が今や妻と母になり、すきをしっかりと置き、種をまいた人は夫と父になった。夫の妻に対する関係が、男性を女性的なことと結びつける。そしてこれが両性間の永続的で、親密な、独特な関係の規範になる。

「大地の内部を女の母胎のように、男のすきの刃先が開いて行く。この二種の行為は、要するにひとつにすぎない。大地に対しても女に対しても、もはや行きずりの性の交りではなく、婚姻によって結合するのである。男の行為は、官能の快楽の充足ではなく、黄金の果実の獲得に向けられている。」<sup>14</sup>

女性はこのように純粋な地上的生活状態から、月の生活段階へと高められた。女性は今や男性の所有物である。子供たちは今や父と母の両方を持っているので、彼らは嫡出の子と考えられる。

母性の側面に特に重点を置いて、文明の進歩をたどり続ける前に、すべての物質の始まりにふさわしい象徴性を——母性原理のそれを、もっと検討してみよう。リュキア人たちがラダと呼んだグレート・マザーは、地上の全生命の頂点に立っている女性原理を擬人化したものである。この女性原理の物質的な基礎は大地であり、それを人間として代表するものは大地の女である。すべての物はこの原理から生れ、またすべてのものが帰って行くのもこの源泉である。子供は誕生のとき子宮から出て行って、死んでまた子宮に戻ってくる。それ故、最初は母親だけが死者を嘆き悲しんだのであった。なぜなら、子供をみごもり産むことによって自然の計画を実現し、そして生命の喪失、外見上の物質の終末を嘆いたのは、女だけだったのだから。もし男が愛する人の死を嘆きたいと思うなら、女性の服を着ることさえして、母なる大地の資格を装わねばならなかった。父親は物質の肥

沃化の意味以上の意味を持ってはいなかったので、ひとたび子供が死ぬと、要求すべき権利も考慮もありはしなかった。死者とのなんらかのきずなを主張するのは、死者を再び受け入れる母性の要素だけであった。ひとたび死が起ると、物質を生命へと飛躍させる男性の能力は、ひたすら忘却の中へ沈むばかりであった<sup>15</sup>。

生命の源泉とその究極の終末に関する、古代人の絶えざる疑問とつり合って、その特殊な点におけるある種の観念を表わすために、実に多くの象徴が用いられた。なかんずく、母なる大地、自然、豊かな自然発生的な成長、水、卵をあげることができよう。ここでバッハオーフェンが明らかにした卵の解釈の意味を考察することは適切なことである。ヘッセが『デーミアン』の中にわざわざ卵の象徴性を取り入れているのを考えてみると、このバッハオーフェンの論考は特に興味深い。もちろん、筆者はヘッセの卵の出所が必ずしもバッハオーフェンだけではなかったかも知れないという可能性は承知しているが、これまでのところ支援する証拠の方が多数あって、上記の結論を示していることになろう。

卵のシンボルに関する論考のもとになっている板金は、「三つの神秘の卵」と題されていて、ローマの別荘 Pamphili にある地下納骨堂の墓の絵から採られたものである。それは中央に置かれた三つの卵について、夢中になって議論し、考えている5人の若者を描いている。上半分と下半分が、はっきり分割されているのがこの三つの卵の特徴である。というのは、水平線の上半分が白、下が黒か、黒ずんだ色をしているからである。

バッハオーフェンは、卵の明るい領域と暗い領域の意味には疑問の余地はない、とかなり明確に述べている。白と黒の交替は、暗黒から光へ、死から生への絶えまのない変転を、象徴的に伝えるのに役立っている。それは永遠の生成と永遠の死から生じる地上の創造、ひとつの柱から他の柱への絶えまのない運動を表わしている。バッハオーフェンによれば、実際人間自身の再生を暗示せんがために、精神をこの地上の存在の限界以上に高めるのに、これ以上に適切なシンボルは他にない。それは生と死の両方を包括し、それらを一つの断ち難いきずなに結びつけている<sup>16</sup>。

卵は宗教的なシンボルとして、森羅万象、すなわち、創造全体の物質的根源を表わしている。

「自らの内部からあらゆる生命を産み出すものの物質的な根源は、生成と消滅の双方を内に秘めている。それは自然の光の側面と影の側面を同時に自らの内に持っている。神秘的な始源の卵は、半分が白で半分が黒か赤である。破壊する力であるテュポンもまた赤で表現されているように、実際これらの色は、生と死、晝

と夜、生成と消滅などと同じように、相互に絶えずまじり合う。従ってそれらは、並存しているばかりでなく、またまじり合っている。死は生の前提条件である。破壊が進行する割合でのみ、創造する力も活動することができる。生成と消滅は、あらゆる瞬間に互いに並行して進行する。地上のあらゆる生物の生命は、創造する力と破壊する力との結合した二重の力の作用である。後者の力が片付けるだけ、前者の力が補充することができる。」<sup>17</sup>

卵の象徴性に関する論考を続け、発展させながら、バッハオーフェンは、卵がバッカス祭の儀式で非常に顕著な役割を演じているのを知っても、我々は驚くべきではない。なぜなら、この儀式は完全に物質に、自然の女性的原理に基づいており、特に受胎のプロセスを強調していたからであると述べている。

「ディオニソス宗教の中心として、二重に色どられた卵は、女性的な物質に生れついた宿命として、過去の世界を支配している最高の法則を我々に示している。…卵の形と宇宙の形との比較はしばしば主張される。卵の両方の半分から天と大地が生じた。インドの宇宙進化論によれば、ブラフマーは長い間始源の卵の中にかくれて住んでいる。それから彼はその卵を二つの等しい半分に割る。そして一つの半分から天を、他の半分から大地を作る。」<sup>18</sup>

卵の黒い半分は大地を表わし、白い半分は天を表わしている。黒い半分は物質的—女性的原理を表わし、白い半分は男性的—霊的な力を暗示している。けれども分離したあとで、かつては一つの全体を包含していたこの二つの部分は、夫々の本来の状態にあこがれるのを決してやめない。「我々の始源的特性を再結合し、分離した二つを一つにし、そして人間の置かれた状態をいやそうという、我々の内部に植えつけられているお互いの欲望は、非常に古いものである。」<sup>19</sup>

こうして我々は、卵が物質的な世界のすべての側面—天と地、光と闇、男性と女性の天性の能力、生成と消滅のプロセス、地上のすべての有機体と生物の根源、高等な生物と下等な生物の根源、そして地上の世界全体と同様に物質的な起源から生じ、人間や動物や植物と全く同一の母を持っている神々の世界全体——を含んでいるのを理解する<sup>20</sup>。

「オルフェウス—バッカスの神秘的な卵の内に、帰依者は自分自身の起源ばかりでなく、自らの神の起源をも知るのである。そしてまさにその中から、彼は自分と血縁の神、つまり自分と同じ卵から生まれた神の運命を、死すべき人間にも約束してくれるあのより良き希望を、そしてより高い不滅の光の世界に入っていくことが、地上に生まれたものにも可能になるという確信を、自分に与えてくれるあのより良き希望を汲み取るのである。」<sup>21</sup>

ディオニソスの律法にとって基本的なものは、両性の結合であり、この結合の実現は結婚と呼ばれる。それは地上的段階においては、感覚的に考えられているが、天上的段階に達すると、排他的な結婚のより大きな純粋性を獲得する。この高い状態においては、卵は夫婦間の献身のシンボル、理想的にはあらゆる結婚に固有のより高い目的のシンボルになる。

アモールとプシュケの神話は、上述の論考の要点の例証になっている。自覚した意志によってというよりは、むしろ自分のこの上ない美しさにひきずられて、プシュケは官能の快樂と困窮の深みに誘い込まれる。アフロディテの奴隷としての彼女の身分のために、彼女は一連の罪を償うように強られる。それにはなかなぞく見るだに恐い下界の通過が含まれている。地獄で眠りに落ちて、彼女は矢の先でついに目覚めさせられ、不死の聖杯を与えられる。エロスと結婚して、彼女は以前女主人に仕えていて求めても空しかった数限りない至福の喜びを体験する。以上の神話には、女性の存在の二つの段階が例示されている。等一に、アフロディテに仕えて、物質の奴隷になり、絶えず新しい思いがけない苦痛に直面し、ついには肉欲の深みに落ち込む女性、等二に、低劣に対する勝利、次いで新しいより高い段階への上昇——アフロディテ的生活からプシュケ的生活への移行である。より低い段階の重要な特徴は、地上的なものであり、より高い段階のそれは、天上的なものである。この過程において、プシュケは地下の神々の住む大地から、より高い領域である月へ、すなわち、天上の大地へと引き上げられる。彼女が成しとげたものは、もはや地上のエロスによるのではなく、天上のエロスによるものである。下にはあらゆる不安と苦しみ、あらゆる失望と行きづまりが激しく荒れ狂っており、上には平和な、永遠の満足の安らかさ。下には地上的なもの感覚的快さ、蛇と暗黒の汚物から生じる豊かな成長——水と大地の奔放な結婚の証拠とシンボル。上には光を求めてまゆから出てくる蝶。下には売春婦の覇権。上には合法の結婚。下には肉欲。上には精神。下には大地の暗い物質。上には純化された天上の大地としての、地上の物体の中の最も純粋なものとしての月<sup>23</sup>。

一般に人類の発展の全般的な傾向は、無秩序な、放縦な状態から、より一層組織化され、洗練された状態へと動いているように思われる。ここから論理的かつ自然にこのパターンは——もちろん人類の原始の状態に関するバウハーフエンの結論に基づき、またその状態を現在の男性支配と比較して——太陽の段階、すなわち、父権の段階への上昇を示すことになろう。ところが、ディオニソス宗教の出現とともに、このめかけの原理とデメテル的原理との争いに、かなり決定的



な要素が入ってきた。バッハオーフェンによれば、古代文明全体にとって不幸な出来事であった。彼の指摘によれば、ディオニソス宗教は結婚のより高い原理に対する支持を含んでいるように思われたが、同時にそれは、父権獲得の争いに対する支持を示すものであった。しかしこの傾向は、極めて表面的な性質のものであった。というのは、この宗教は父性原理の発展に大いに貢献したのだが、それはより精神的な父権の状態を犠牲にしたばかりでなく、女性を犠牲にした上でのことだったからである<sup>24</sup>。

ディオニソス神の彗星のような出現と受容の恐らく最も決定的な要因は、古代母権制度のアマゾンの形態と、それに附随する一般的な野蛮な慣習に固有の極端性であったろう。人々は自からに強いた厳しい掟の故に、アマゾンの生活の不自然な高潔さに堪えることができなかった。その感覚的な美と無類の輝やかしきの故に、二重に魅惑的であったこの神は、直ちに、喜んで受け入れられた。この神の崇拜に抵抗することはできなかった。まもなく彼ら（アマゾンたち）の決然たる抵抗と不屈は、それに等しいひたむきな献身に変わった。新しい神に対して戦ったこれらの女戦士たちは、今やこの神の最も熱心な十字軍兵士、信奉者となった。これらの女性たちが穏健になるのは、不可能なことに思われた。伝説はバッカス崇拜の出現にかかわる血にまみれた儀式や出来事を書き留めている。本来の乱痴気騒ぎの習慣と、平和な楽しみと、人間の生命の高揚を強調したそのあとに続くディオニソス的精神との間には、著しい相違があるので、これらのバッカス的爆発を後代の発明と見なすことには疑問がある<sup>25</sup>。アーウィン・ボードは、狂気じみた忘我のお祭り騒ぎを、次のように要約している。

「祭礼は夜の暗闇の山頂で、たいまつゆらめく気まぐれな光に囲まれた。音楽の騒がしい乱れた音が聞こえた。青銅のシンバルの鳴る音。ケルトドラムの鈍い雷鳴のようなとどろき。これらすべてを貫いてひびき渡ったのは、沈んだ音色のフルートの気を狂わせるような斉奏であり、そのフリジヤの奏者たちが最初によみがえった。この狂気じみた音楽に興奮して、信者たちの合唱隊が金切声や歓声をあげて踊る。歌声は何も聞こえない。激しい踊りに息が切れて、きちんとは歌えなかった。これらの踊りは、アポロの賛歌の中でホーマーのギリシヤ人たちが前に進んだり、旋回したりしたステップの調子の整った動きとは全く異なるものであった。狂気のような、旋回する、向こう見ずの渦巻と踊りの輪を描きながら、これらの靈感に打たれた人々は、山の斜面の上で踊った。疲労の頂点に達するまで、輪を描いてぐるぐる踊り回ったのは、大抵女たちであった。彼らは奇妙な身なりをしていた。彼らは狐の毛皮を縫い合せたように見える長くたれた着物、

バックスの服を着ていた。この着物の上に雌鹿の皮をはおり、頭には角をつけてさえた。髪は風になびくにまかせていた。彼らはバックスに捧げた蛇を手を持ちたり、短剣、もしくはバックスの杖を振り回したりしていた。その先端はつたの葉でかくされていた。こうしたやり方で彼らは、あらゆる感覚が興奮の極みに達するまで、荒々しく暴れ回った。そして『聖なる狂気』に狂って、彼らは彼らのいけにえに選ばれた動物に襲いかかり、その補えられたいけにえをばらばらに引き裂いた。それから齒で血のしたたる肉をくわえ、生のままむさぼり食った。』<sup>26</sup>

官能と性愛の傾向の強いディオニソス崇拜は、女性の性質に異常な親近性を示した。この宗教がアピールしたのは、主として女性に対してであった。女性たちの間に、それは最も献身的な奉仕者ばかりでなく、最も熱狂的な承認と支持を獲得した。女たちにとってディオニソスは、最高の神に等しいものであった。彼は高貴である上に官能的で、彼らのあらゆる熱望の源泉であり、彼らの存在全体を中心であった。女たちが最初に彼の栄光に注目し、その崇拜を広め、その勝利を促進した。ディオニソス崇拜のような宗教が、その最高の熱望の基礎を、性の成就という戒律に置いている場合には、失敗の見込みはまずあり得ない。こうして穀物の穂やパンの塊は、まもなく酒神バックスのぶどうに席をゆずった。ミルク、蜂蜜、水などの古代人たちの基本的な供物は、ぶどう酒、つまり官能的な熱狂に誘うものによってとって代わられた<sup>27</sup>。

しかしながら、ディオニソス崇拜によって導入された、女性共有制の原則へ後退するこの傾向にも拘らず、変化はこの方向を維持することもなく、最終的には、父性の観念を受け入れる方へ転向する。父親による支配的な地位の継承は、自然と物質の束縛からの精神の解放、物質的生活の法則を越えた人間生活の高揚をもたらす。父権制の出現とともに、精神的なものが、生活のより低い領域、つまり純粋に物質的な領域と関連のある肉体的な生活よりも上位をしめる。この純化された状態において、人間は地上的なものの範囲から脱して、宇宙のより高い領域を観察する<sup>28</sup>。「子供を産む母性は、万物を産む大地に固く結びつけられているけれども、勝利を取めた父性は、天国の光にあずかっているのである。」<sup>29</sup>

古い時代が死滅すると、代りに新しい時代、アポロの時代が出現する。女性の支配は男性の支配によって押しのけられる。夜が晝に敗北する。左側が右側に譲歩する。古代の宗教は、この太陽の上昇を、母性的な暗黒に対する父性的なものの勝利と見なした。ディオニソス的父性、男根の受精作用は、生命を産み出すために、それを受け入れてくれる対象を絶えず求めていたが、男根の太陽は、太陽の生命の領域に入り、そして受精作用に向かういかなる傾向からも自己を切斷し

て、もはや女性的なものとのいかなる結合も切望することはない。アポロは母性的なものをつなぐあらゆるきずなから、完全に自己を断ち切ったのである。というのは、彼の父性は精神的なものであり、従って不死の夜から完全に免れているからである<sup>30</sup>。

恐らく父性の原理を十分に実現できた二つの力は、デルポイのアポロと、男性の支配権という古代ローマの政治思想であったろう。「多分デルポイの観念よりも精神性は少なかったけれども、帝国の原理は、その法律上の形態においては、神（アポロ）の純粹に精神的な力を完全に欠いた基盤ではあるが、公的生活と私的生活との密接なつながりを持っていた。」<sup>31</sup>

帝国は攻撃から身を守ることはできたし、また文明の野蛮化と、文明の全く物質的な存在への墮落とに対応することができた。けれども、アポロの文明はそのような防御力を持たず、従ってより抵劣な教養のより強大な力に降伏した。アポロ的な純粹性と精神性は、ディオニソスの物質性に次第に敗れた。こうして実際には勝ち誇った女性の原理を迎え入れたのであった。

「輝やかな二つの力が、デルポイで結んだ親密な連合は、ディオニソスの男根崇拜の繁栄を、アポロの不変の静寂と明澄によって純化し、それ以上に高めようと企てられていたようであるが、全く正反対の結果になった。多産の神のより大きな感覚的なアピールが、彼の仲間のより精神的な美をしのいだ。そしてアポロのものであるべきであった力を、ますます奪い取っていった。アポロ時代の代りに、夜明けを迎えたのはディオニソス時代であった。ゼウスはその権力の杖を、誰であろうディオニソスに贈ったのである。そしてディオニソスは他のすべての信仰を同化し、ついには古代世界全体を支配した普遍的宗教の中心になった。」<sup>32</sup>

デルポイのアポロの精神的原理は、古代人に対して、十分な力と魅惑によって自己を主張することが全くできなかつた。それは感覚的、性的領域のより抵劣な魅力に打ち勝つには、救いようもなく不向きであった。

今日の父性の永続的な勝利は、ローマの政治思想のおかげである。上述のように、外部からの援助と支持を全く欠いていたデルポイのアポロ的観念は——これは全く厳密に宗教的観点から見てのことなのだが——ディオニソスの力の猛攻撃に抵抗するのに適してはいなかつた。しかし今やローマの政治思想によって高められ、支持され、美化されて、父性原理の厳格な法律的形態が登場する。そして人々は父権制度の安定性と永続性の可能性を認識するのである。ローマの政治思想に特有の側面は、それが生活全体の基礎になったこと、そしてこの基礎を、宗

教の墮落と風俗の腐敗から、また母性の原理と見解への復帰から守ったことである。ローマの法律はまたオリエントからの猛攻と、イシスやキュベレの広がって行く母性崇拜とに抵抗し、更にディオニソスの秘義にさえ抵抗した<sup>33</sup>。

「…それはアウグストゥスによって最初に立法化された女性多産の原則に抵抗した。それは古いローマの精神を軽蔑して、『権標』（法的な力）と、『軍標』（軍事的な力）を奪い取ろうとして、かなりの成功を収めた皇室の夫人や母親たちの影響に抵抗した。それは性的関係の全く自然な見方に対する、女性の平等の権利に対する、子供を産む母性への尊敬に対する、ユスティアヌスの好みに断固として反対した。オリエントにおいてさえ、女性原理についてのローマの非難に対して、決して完全に消えてはいなかった抵抗と戦って、成功を収めることができた。」<sup>34</sup>

二つの制度——ローマの政治思想とアポロ的理想主義の観念——の有効性、安定性、永続性を比較して、強力なローマの政治思想が、明らかに優位に立っていることに注目することは、興味深いことである。あらゆる強敵に直面して、純粋に宗教的な原理の弱点は直ちに明らかになる。政治思想によって示された厳格な形式は、屈服し滅びるよりもむしろ忍耐し勝利を収めるために、もろい人間性に対して必要な支持と扶養を与えてくれるのである。「古代人は義父の死に復讐した養子アウグストゥスを、第2のオレステスと見なし、彼の統治を新しいアポロ時代の夜明けと考えた。」<sup>35</sup>しかしながら、人類は今日の最高の段階の勝利——父性の勝利を、やはり基本的にはローマの政治構造に負っているのであって、宗教的な観念への献身に由来する内的な強さと称されるものによるのではない。ローマの政治思想の普及と、エジプトの母性崇拜の広まりとを、表面的に比較しただけでも、上述の点は十分に例証される。「明らかに、オリエントの屈服が完全なものとなり、最後のエチオピアの女王が死んだときに、政治の舞台上で敗北した母性原理は、更に倍加した力を以て新たな勝利の行進を開始し、政治の領域においては、取り返しのつかないほどの損失と思われたものを、宗教の領域において西洋から奪い返したのである。」<sup>36</sup>ある戦いが終りを告げると、覇権を求める母性原理の苦闘は、再び別の活動分野へ移行し、それからまた別の分野へ移るのであった。純粋に精神的な父性の、母性原理の新たな進出に対する降伏は、あらゆる時代の男性が直面させられた苦境を説明するものである。母性的、物質的原理の勢いと、強烈なアピールに打ち勝とうと試みること、こうして究極のこと、つまり個人生活を神聖な父性原理の純粋さへ向上させることは、男性にとって絶えることのない戦いであった<sup>37</sup>。

次章においてより詳細に論証するように、ヘルマン・ヘッセは、母性原理との争いが引き起した同じ太古からの苦境に、同様に直面していた。彼のディレンマの解決は、非常に異なる性質の側面と影響を含む、かなり独得で複雑な図式の助けを借りて成しとげられた。C. G. ユングの心理学が、ヘッセの内外に荒れ狂っている妥協不可能に見える対立を調停した貢献は、極めて重要なものであった。それ故ユングが理解していたような女性原理の役割の側面に再び特に力点を置いて、これらのユングの貢献といわれるものの評価に目を向けることにしたい。

## 注

1. Ingeborg Heiting : Der Muttergedanke als Zeitausdruck in neuerer Literatur (Köln : Buchdruckerei Orten, 1938) , p. 20
2. Ibid., p. 21
3. Ibid., p. 21
4. Bachofen : Myth, Religion and Motherright, p. X X X I V.
5. Ibid.
6. Ibid., p. VI.
7. Ibid., p. X X.
8. Ibid.
9. Ibid., p. X III.
10. Ibid.
11. Ibid., pp. 190—191.
12. Bachofen : Versuch über die Grabersymbolik der Alten (Basel : Verlag Helbing & Lichtenhahn, 1925) , p. 202.
13. Ibid.
14. Ibid.
15. Bachofen : Motherright, p. 155.
16. Bachofen : Versuch über die Grabersymbolik der Alten, p. 10.
17. Ibid., p. 13.
18. Ibid., p. 20.
19. Bachofen : Myth, Religion and Motherright, p. 29.
20. Ibid.
21. Bachofen : Versuch über die Grabersymbolik der Alten, p. 25.
22. Bachofen : Myth, Religion and Motherright, p. 30.
23. Ibid., p. 45.
24. Ibid., p. 100.
25. Ibid., p. 102.
26. Erwin Rohde : Psyche, The Cult of Souls and Belief in Immortality among the Greeks, trans.

W. B. Hillis (New York : The Humanities Press, 1925) , pp. 260—261.

27. Bachofen : Myth, Religion and Motherright, p. 102.
28. Ibid., p. 109.
29. Ibid., p. 110.
30. Ibid., p. 115.
31. Ibid., p. 116.
32. Ibid.
33. Ibid., p. 118.
34. Ibid.
35. Ibid.
36. Ibid.
37. Ibid., p. 119

本稿は、V. J. Bennet : The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hesse. 1927. の中の〈J. J. Bachofen's Motherright〉の訳である。本文の英語を内尾一美君が訳し、引用の独語を渡辺信生が訳した。訳文について、同僚の英語科教授柏原啓佐先生に、貴重な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげる次第である。